

観天 望気

果たすべき役割

古来より造林が盛んにおこなわれた国内有数の林業地でない限り、多くの地域では、生活の必需品として、また産業用として、天然林（広葉樹林）を活用した木質燃料が盛んに生産されてきた。また、一部の肥沃地には、地域内で必要な量の用材を生産するための人工林が点在した。

当地域においても、ご多分に漏れず、森林は燃料生産の場として重要な役割を果たし、白炭の産地として山村社会においての大きな役割を果たしてきた。もう半世紀以上も前、まだ木質燃料が主体の私たちが子どもの時代には、天然林（広葉樹林）は17〜18年サイクルで伐採が繰り返され、森林は生活のリズムのなかで見事に循環していた。川には多種多様な魚がすみ、豊かな水の流れの中で川遊びを楽しんだ懐かしい時代が記憶によみがえる。

戦後の復興が一段落したころから、「木質から化石へ」の燃料革命や木材価格高騰による国の拡大造林（天然林を人工林に）政策が推進され、造林ブームの時代があった。その後、輸入材や代替え材の普及などにより国産材の需要は低迷の一途をたどり、林家は経営意欲を失い、さらに世代の交代により林業離れは顕著化した。

このような状況にあっても、当組合は間伐など森林整備を推進して共販や加工などに邁進し、地域林業とともに歩んできた。さらに次の展開を期して、2009年には国内最大級の国産材製材工場を稼働させた。熟成した森林を50年を伐期として伐採し、加工して付加価値をつけて出荷し、伐った跡は必ず植える——この「佐伯型循環林業」を提唱し、森林の持続的な循環をめざしている。

森林は人が手を加えることで、木材という資源の生産の場となり、気象緩和や土砂災害防止、水源涵養、生物多様性の保全など、かけがえない多くの恩恵をもたらしてくれる。

森林の持続的循環の輪が大きく広がり、多少なりとも低炭素社会やカーボンニュートラルの実現に貢献できることを期待する。



戸高 壽生

佐伯広域森林組合 代表理事組合長

とだか としお

1948年大分県生まれ。68年林業経営に着手し、全国の林業地において研修・研鑽を重ねる。83〜92年大分県林研グループ連合会会長、97〜2005年直川村長を経て、08年より現職。大分県森林組合連合会副会長、大分県森林審議会会長も務める。